
白球に願いを

塚矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白球に願いを

【Zマーク】

N4481N

【作者名】

塚矢

【あらすじ】

甲子園の決勝戦を描いた物語

(前書き)

友人に頼まれて執筆。野球は詳しくないので至らない点がありますが、宜しくお願いします。

カーン

乾いた金属音と共に白球が飛んでゆく。
観客席からは大きなどよめき。

実況の声も、観客の声も、チームメイトの歓喜の声も、全てが無音
になり俺の意識は白球だけに集中せざる。

- - - 賴む、入ってくれつつ！ -

心中でそう願う。いや、懇願といつてもいい。俺は、この打席に
自分の野球人生の全てを賭けた。

この状況では、賭けないというほつがおかしかつただうつ。
俺は、無我夢中でバットを振りぬく。

当たったという感触が手を伝わりビリビリと体中に流れ込む。

スコアボードには、10 - 9 と数字が刻まれている。

これが最後の攻撃。

これが、入れば同点。入らなければ1点差。取られればそれで負け。

折角ここまで来たんだ。一番天辺を掴み取つてやる……！

打球は速度を落とし、フラフラと落ちてくれる。

頼む、頼む！
お願いだ！

なおも落ち続ける。

卷之二

田を瞑つてセカンドベースを蹴る。

墨にいた3人のランナーはもうホームに帰っている。

これが、入ればつつ！！

センターが追う。

打球が

ビ
ツ

グラブを弾いた。それを見て俺は更に加速し、足の回転を早める。センターが転んで倒れている間にカバーに入ったレフトがボールを取り、セカンドへ。

しかし、俺はホームへと向かう。

思い出せ。俺が今までやつてきたことを。

あれは、1年生の頃。

俺たちは希望を胸に秘め、私立藤堂第一高校へと入学した。

ここは、野球が強いと言われているからであった。

野球部に入部届けを出す。

中学ではエースで4番として都大会ベスト4までいった。

その自信は今でも俺を支えている。

野球部に入る。

そこには、今まで自分が見たのとは違った光景があった。

飛んできたボールをダイビングキャッチしてすぐに送球。1バウンドで正確にホームへ。

ドクンと心臓が高鳴る。

凄い。

その一言しか出でこなかつた。

ここまで圧巻のプレイをされると自分がここまでやつてきただいことが馬鹿らしくなつてしまひ。

「新入生、自己紹介をしていけ」

監督が言つた。

右から順に自己紹介をしていく。

自分の番だ。

「壬生中学からきました。吉良恵一と言ひます。ポジションは投手です。宜しくお願ひします！」

「ほひ、七色の変化球と言われてゐる超中学級の吉良か。期待している。」

期待。自分が期待されている。それだけで恵一は天にも昇る気持ちだつた。

そして、1年が過ぎ、また1年が過ぎた。大会では田だつた成績をあげていなかつた。
せいぜい県予選の3回戦止まり。

何故、何故なんだ？

俺は、自分のピッチングは悪くない。打たないチームメイトが悪い
と思っていた。

でも、違った。

それに気づいたのは3年の春だった。

ピンチで連打を許してしまって、それが決勝点となってしまっていた
のだ。

たった2点。されど2点。

これが、取れなかつた。

チームは凡打の山。せいぜい1点どまり。

そして俺達が練習したのは、走墨だった。

毎日100本のダッシュ。

5kmのマラソン。
ベーラン50周。

それを夏の最後の大会まで一日もかかさず続けた。

その結果チーム全員が足腰を強化され、深いショートゴロでもサードがちょっとミスしただけでも内野安打になる足、打席ではしつかり踏ん張ることが出来、コンパクトな打撃が出来るようになり、県予選からもの凄い勢いで優勝して、甲子園へのキップを掴み取った。

甲子園でもその勢いは止まらず、決勝戦まで恵一は1失点。チームとしては準決勝までは全てホールドで勝ち上がった。

そして今、序盤から打ち込まれ窮地に立たされていた。

打線もなんとか粘つたが大会N.O.1投手といわれる雑賀高校の三鷹を打ち崩すのは一苦労。

小刻みに点を取り、4点差。

絶対、絶対に優勝してやる、ホームへと滑り込む、中継のセカンドからバックホーム。

クロスプレイ。

俺は審判の判断を待つ。

審判が手を上げた

「アウトオオオツツ！…！」

甲子園が沸いた。実況の熱い放送が耳にやけに入ってくる。

「試合終了です！…！　10 - 9 ! ! 夏の優勝高は、雑賀です！」

…終わった…

整列をする。

自然に、視界がぼやけ、頬を涙が伝つ。

こうして、藤堂第一の3年の夏が終わりを告げた。

(後書き)

誤字脱字「」報告ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4481n/>

白球に願いを

2010年10月8日14時23分発行